

石鳥谷町出身の瀬川達矢さん(34歳)は、元診療放射線技師。静岡県(4)の病院で約10年ほど勤務してました。太陽を浴びない室内での長時間にわたるパソコン作業の勤務に疲れを感じるようになった頃、実家への帰省と祖父母がやっていた「農業」という選択肢が頭をよぎるようになったといひます。大迫地区の地域おこし協力隊への着任が決まり、昨年2月に奥様と2歳の娘さんを連れて、ご家族で大迫へ移住。現在は、葡萄が丘農業研究所に籍をおき、葡萄の栽培技術を学ぶとともに、今年6月からは自分の名義でぶどう畑を借り受け、いよいよ実践に取り組み始めたところ。農業は、思ったより大変なことも多いですが、サラ



瀬川 達矢さん



リーマン時代と違い、仕事の中のストレスは減りました。また、自分で計画して、思ったことをどんどんトライできることに楽しさを感じています。実家のある石鳥谷町八重畑にも圃場を借り、ブルーベリーを植樹。ブルーベリーとぶどうは、繁忙期が異なるため両立していけるのではないかと考えています。あまり手をかけずに収益が成り立つ、生産性の高い農業を目指したいという瀬川さん。ロボット刈払機などスマート農業の導入やブルーベリーの摘み取り観光農園なども検討しているとのこと。当面の目標は、「夢を夢で終わらせずに現実化させること！」将来楽しみな場所が、また一つ増えました。

近所とのつながりを大切にしながら、小さな畑を耕してきた大迫の祖父の暮らしたに惹かれるものを感じ、平成30年12月大迫地区の地域おこし協力隊に着任しました。昨年6月から「産直アスタ」前に生食用ぶどうの圃場を借り受け、研修を積みながら、自ら栽培することに。さっそく「産直アスタ」の組合員にもなり、秋には出荷販売まで漕ぎつけました。また、知りあった農家から放置されているブドウの木を「好き



佐藤 真衣子さん

ドウの木を「好きに使ってい」と言われたのをきっかけに、そのぶどうからジュースを製造。いきさつを自分の描いた漫画で表現した説明書をつけ、こちらも産直で完売することができました。絵を描くこととイベントが大好きという真衣子さん。植木鉢へのペイント企画や葡萄のキャラクター募集など、農業とアートを連携させたユニークな企画を次々と発信し、独自のぶどうファンを増やしています。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けイベントの中止など残念な一面もありますが、集まったイラストを圃場に展示したり、販売の際箱と一緒に入れるなどの活用を計画しているとのこと。秋には、収穫と併せ、オリジナルの作成と出荷まで体験できる企画をやってみたく。農業は始めたばかりで、日々試行錯誤の繰り返しではありますが、自分の好きな要素を取り入れながら、小さな農の楽しい生活を提案していきたいと、太陽のような笑顔で話してくれました。

家族経営協定合同調印式

3月30日、農業委員の家庭2組が家族経営協定を締結する運びとなり、合同調印式を開催しました。締結したのは、南城の伊藤富壽委員と石鳥谷町関口の中村清孝委員です。それぞれ稲作や果樹栽培を家族経営で行っており、「家族の協力なしには経営は成り立たない」「家族に感謝している」とコメントしていました。花巻市内の協定締結世帯累計は、140組となりました。



農地の日 7月15日



農地法制定60周年を記念して平成24年から定められている「農地の日」。農業委員会では、これに合わせ、7月30日(木)に、岩手県農業会議の農地相談員、三浦良夫氏を講師に招き、勉強会を開催しました。三浦氏からは、「人・農地プランの実質化」にかかる県の方針や自治体ごとの推進体制について説明いただいたほか、すでに話し合いを終えた東和町小山田地区からの報告を聞き、参考としていました。

農地パトロール



7月1日から14日まで、市内を10の区域に分け「農地パトロール」(利用状況調査)を実施しました。農業委員・農地利用最適化推進委員と市農政課および農業委員会事務局職員が、荒廃農地の発生状況や違反転用がないか等を確認して回りました。市内の農地(田畑)は、3月末で約1万5800haあり、そのうち遊休農地は34.4haとなっています。農地の受け手不足もあり、遊休農地の解消には多くの労力と時間が必要なため、未然防止に努め労力を軽減することも重要です。自分の農地だからといって一人で抱え込まず、困りごとは地元の農業委員に相談してください。貸借や売買、作業受委託、中間管理事業など、どうしたら農地を適切に維持管理していけるのか、良い解決方法を探していきたいでしょう。

